

新編 国歌大観

第三卷 私家集編 I

歌集



角川書店

新編国歌大観 第三卷

私家集編Ⅰ 歌集

昭和六十年五月十六日 初版発行

編 者 「新編国歌大観」編集委員会

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店



東京都千代田区富士見一十三一三 郵便番号一〇二一
振替東京三一一九五二〇八 電話 営業〇三三八八五二 編集〇三三八八四二

印刷・製本所 凸版印刷株式会社

© Printed in Japan ISBN4-04-020132-9 C3592

落丁・乱丁本はお取替いたします

凡 例

①『新編国歌大観』第三卷私家集編Ⅰ歌集部に収める各集は、原則として、広く一般に流布し、かつ歌数の多い系統の中から最善本を選んで、底本とした。

②本文作成にあたっては、底本を尊重したが、利用の便をはかつて、以下のような校訂を加えた。

①底本における和歌・連歌等の本文の偶然的な脱落・衍字・誤写などが他本によって修正しうる場合は校訂を行なった。

②底本の歌順が明らかに誤りと認められる場合は、他本によって訂正し、その旨を解題に記した。

③底本に存するミセケチなどは表示せず、原則として訂正結果に従った。また底本に存する記号・注記・校異の類は、作品成立時、もしくはそれに近い時期に加えられたと判断される場合にのみそのまま残し、他は原則として省略した。

④本文が孤本・稀本であるため他本によって校訂本文を作成しえぬ場合は、書写の誤りと見られる部分の右傍に（ママ）と注した。

⑤本文が判読しえぬ場合は字数分の□を用いることとし、長文で字数不明の場合は「」によって表示した。

⑥本文に和歌・詞書等の脱落があり何行分かの空白がある箇所には、（空白）と表示し、また何字分かの空白がある場合は、そ

の部分で「」の記号により表示した。

③奥書・識語の類は、その集の撰者が自ら書いたと認められるもの以外は原則として省略した。ただし、撰者以外の奥書・識語は、必要に応じて解題に記した。

④各集ごとに、和歌・連歌・歌謡・漢詩句の別なく、その歌頭（句頭）に通し番号を打った。ただし本文中に、改行等の形で独立表示されているものに限った。

⑤表記は底本のそれをできるだけ尊重したが、よみやすさへの配慮から、次のような処置をとった。

①いわゆる変体仮名は普通の平仮名に改めた。

②異体・別体の漢字は通行の字体に統一した。

③仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一した。ただし字音語のうち、物名歌など特別の場合は底本通りの表記とした。

④活用語などの漢字表記については、必要に応じて最少限の送り仮名を加えた。

⑤漢字表記の助詞・助動詞は原則として平仮名に改めた。その他特異な宛字で平仮名に改めたものがある。

⑥反復記号は用いなかった。

⑦清濁は区別して示したが、清濁をこえた掛詞として用いられるものについては、原則として清音とした。

賀茂保憲女集	60 保憲女	故侍中左金吾家集(頼実)	俊忠集	104 俊忠集	西行法師家集	126 西行家	
道信集	61 道信	82 故侍中	六条修理大夫集(顕季)	105 六条修	聞書集(西行)	127 聞書	
馬内侍集	62 馬内侍	経信母集	83 経信母	散木奇歌集(俊頼)	106 散木	長秋詠藻(俊成)	129 長秋
朝光集	63 朝光	定頼集	84 定頼	行尊大僧正集	107 行尊	秋篠月清集(良経)	130 月清
道綱母集	64 道綱母	能因法師集	85 能因	基俊集	108 基俊	拾玉集(慈円)	131 拾玉
相如集	65 相如	伊勢大輔集	86 伊大輔	雅兼集	109 雅兼	壬二集(家隆)	132 壬二
為頼集	66 為頼	入道右大臣集(頼宗)	87 入道右	忠盛集	110 忠盛	拾遺愚草(定家)	133 拾遺愚
実方集	67 実方	範永集	88 範永	頼輔集	111 頼輔	拾遺愚草員外(定家)	134 拾員外
清少納言集	68 清少	相模集	89 相模	待賢門院堀河集	112 堀河集		
長能集	69 長能	出羽弁集	90 出羽弁	成通集	113 成通		
嘉言集	70 嘉言	四条宮下野集	91 下野	田多民治集(忠通)	114 田多		
大貳高遠集	71 高遠	成尋阿闍梨母集	92 成尋母	清輔集	115 清輔		
紫式部集	72 紫集	弁乳母集	93 弁乳母	林葉和歌集(俊恵)	116 林葉		
和泉式部集	73 和泉集	大貳三位集	94 大貳三	頼政集	117 頼政		
和泉式部続集	74 和泉続	為仲集	95 為仲	重家集	118 重家集		
御堂関白集(道長)	75 御堂	経信集	96 経信	教長集	119 教長		
大斎院前の御集	76 大斎前	国基集	97 国基	登蓮法師集	120 登蓮		
大斎院御集	77 大斎院	顕綱集	98 顕綱	忠度集	121 忠度		
発心和歌集(選子内親王)	78 発心和	康資王母集	99 康資母	林下集(実定)	122 林下		
輔親集	79 輔親	周防内侍集	101 周防	唯心房集(寂然)	123 唯心房		
公任集	80 公任	祐子内親王家紀伊集	102 紀伊	殷富門院大輔集	124 殷大輔		
赤染衛門集	81 赤染	在良集	103 在良	山家集(西行)	125 山家		

第三卷 私家集編Ⅰ 歌集目次

人丸集（書陵部蔵五〇六・八）……………	九	八四五
赤人集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	一三	八四五
家持集（書陵部蔵五一〇・一二）……………	一七	八四七
猿丸集（書陵部蔵五一〇・一二）……………	二〇	八四八
小町集（陽明文庫蔵本）……………	二二	八四九
業平集（尊経閣文庫蔵本）……………	二三	八五〇
遍昭集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	二五	八五〇
敏行集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	二七	八五一
素性集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	二七	八五一
興風集（書陵部蔵五一〇・一一五）……………	二八	八五三
友則集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	二九	八五三
躬恒集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	三一	八五三
忠岑集（書陵部蔵五一〇・一二三）……………	三八	八五三
兼輔集（書陵部蔵五一〇・一二）……………	四二	八五四
伊勢集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	四五	八五四
是則集（書陵部蔵五一〇・一二〇）……………	五三	八五五
宗千集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	五四	八五五
敦忠集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	五五	八五六
貫之集（陽明文庫蔵本）……………	五八	八五六

公忠集（書陵部蔵五一・二）……………	七四	八五七
清正集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	七五	八五七
頼基集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	七七	八五八
忠見集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	七八	八五八
中務集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	八二	八五九
信明集（正保版歌仙家集本）……………	八六	八五九
朝忠集（小堀本*）……………	八九	八五九
仲文集（書陵部蔵五一〇・一一八）……………	九〇	八六〇
元真集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	九三	八六一
順集（書陵部蔵五一・二）……………	九八	八六一
斎宮女御集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	一〇四	八六二
元輔集（正保版歌仙家集本）……………	一二〇	八六三
兼盛集（書陵部蔵五一〇・八）……………	一二六	八六四
能宣集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	一二〇	八六五
高光集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	一二一	八六五
重之集（西本願寺蔵三十六人集*）……………	一二三	八六五
小大君集（書陵部蔵五一〇・九二）……………	一二八	八六六
篁集（書陵部蔵五一〇・一七九）……………	一四二	八六七
仁和御集—光孝天皇—（書陵部蔵五〇六・七五）……………	一四五	八六七
深養父集（書陵部蔵五一〇・三四）……………	一四五	八六八
千里集（書陵部蔵五一・二三）……………	一四六	八六八
三条右大臣集—定方—（書陵部蔵五〇一・六九）……………	一四九	八六九
元良親王集（書陵部蔵五一〇・一二〇）……………	一五〇	八六九
藤六集—輔相—（書陵部蔵五一〇・一三二）……………	一五三	八六九

九条右大臣集—師輔—(三手文庫藏本)	一五〇
檜垣姫集(穗久邇文庫藏本)	一五七
安法法師集(書陵部藏五〇一・一九六)	一五八
増基法師集(群書類従本)	一六一
清慎公集—実頼—(書陵部藏五〇一・四六)	一六四
海人手古良集—師氏—(書陵部藏五〇一・四四八)	一六七
一条摂政御集—伊尹—(益田家旧藏本*)	一六八
本院侍従集(群書類従本)	一七三
義孝集(九州大学藏本)	一七四
小馬命婦集(静嘉堂文庫藏本)	一七六
西宮左大臣集—高明—(書陵部藏五〇一・六七)	一七七
源賢法眼集(書陵部藏五〇一・六三)	一七九
惠慶法師集(書陵部藏五〇一・四一) (越桐喜代子氏藏本*)	一八〇
兼澄集(島原松平文庫藏本)	一八六
好忠集(天理図書館藏本)	一九〇
千穎集(穗久邇文庫藏本)	一九七
賀茂保憲女集(榊原家藏本)	一九八
道信集(榊原家藏本)	二〇四
馬内侍集(三手文庫藏本)	二〇六
朝光集(書陵部藏五〇一・一九八)	二二一
道綱母集(書陵部藏五〇一・一二二)	二二四
相如集(内閣文庫藏本)	二二六
為頼集(三手文庫藏本)	二二七
実方集(書陵部藏一五〇・五六〇)	二二九

清少納言集(書陵部藏五〇一・二八四)	三八三
長能集(神宮文庫藏本)	三八四
嘉言集(京都女子大学藏本)	三三三
大式高遠集(書陵部藏五〇一・一九〇)	三三七
紫式部集(実践女子大学藏本)	三四五
和泉式部集(榊原家藏本)	三四八
和泉式部続集(榊原家藏本)	三四八
御堂関白集—道長—(島原松平文庫藏本)	三七七
大斎院前の御集(日本大学藏本)	三七九
大斎院御集(書陵部藏五〇一・三〇二)	三八八
発心和歌集—選子内親王—(島原松平文庫藏本)	三九三
輔親集(書陵部藏一五四・五四九)	三九四
公任集(書陵部藏五〇一・七三九)	三〇〇
赤染衛門集(島原松平文庫藏本)	三三二
故侍中左金吾家集—頼実—(島原松平文庫藏本)	三三七
経信母集(書陵部藏一五〇・五七四)	三三九
定頼集(出光美術館藏本)	三三〇
能因法師集(榊原家藏本)	三三五
伊勢大輔集(東海大学藏本)	三四〇
入道右大臣集—頼宗—(尊経閣文庫藏本)	三四四
範永集(書陵部藏五〇一・三〇五)	三四六
相模集(浅野家本*)	三五〇
出羽弁集(書陵部藏五〇一・一三八)	三六〇
四条宮下野集(書陵部藏五〇一・一五四)	三六三

成尋阿闍梨母集（書陵部藏五〇一・一八二）	三七〇	八八	林葉和歌集—俊惠—（神宮文庫藏本）	四九八	九〇
弁乳母集（書陵部藏五五三・一七）	三七八	八八	賴政集（書陵部藏五一・一五）	五二五	九二
大式三位集（書陵部藏一五〇・五五三）	三八一	八九	重家集（尊經閣文庫藏本）	五二九	九二
為仲集（群書類従本）	三八二	八九	教長集（書陵部藏統群書類従本）	五四一	九三
経信集（書陵部藏五〇一・二〇〇）	三八七	九〇	登蓮法師集（徳川黎明会藏本）	五四八	九三
国基集（志香須賀文庫藏本）	三九三	九〇	忠度集（書陵部藏五〇一・一五八）	五五九	九四
顯綱集（書陵部藏五〇一・二二五）	三九六	九〇	林下集—実定—（慶応大学藏本）	五六一	九四
康資王母集（群書類従本）	三九九	九〇	唯心房集—寂然—（高松宮藏本）	五六八	九五
江帥集—匡房—（書陵部藏五〇一・一五三）	四〇二	九〇	殷富門院大輔集（書陵部藏五〇一・一三七）	五七一	九五
周防内侍集（東海大学藏本）	四〇二	九〇	山家集—西行—（陽明文庫藏本）	五七七	九六
祐子内親王家紀伊集（穂久邇文庫藏本）	四〇五	九〇	西行法師家集（石川県立図書館藏本）	六〇一	九七
在良集（書陵部藏一五〇・五五七）	四〇六	九〇	聞書集—西行—（伊達家旧藏本*）	六一三	九八
俊忠集（書陵部藏五〇一・三一八）	四〇七	九〇	殘集—西行—（書陵部藏五〇一・一六八）	六一八	九八
六条修理大夫集—顯季—（大東急記念文庫藏本）	四一九	九〇	長秋詠藻—俊成—（国会図書館藏本）	六二九	九八
散木奇歌集—俊頼—（書陵部藏五〇一・七二三）	四二六	九〇	秋篠月清集—良経—（天理図書館藏本）	六三三	九九
行尊大僧正集（書陵部藏一五〇・五五六）	四六三	九〇	拾玉集—慈円—（青蓮院藏本）	六五六	九〇
基俊集（書陵部藏五〇一・七四三）	四六八	九〇	壬二集—家隆—（蓬左文庫藏本）	七四二	九二
雅兼集（書陵部藏五〇九・四三）	四七三	九〇	拾遺愚草—定家—（書陵部藏五一〇・五一）	七八七	九三
忠盛集（日本大学藏本）	四七四	九〇	拾遺愚草員外—定家—（書陵部藏五一〇・五一）	八三一	九三
顯輔集（書陵部藏一五〇・七四〇）	四七八	九〇	全五巻収載作品一覽		九四
待賢門院堀河集（島原松平文庫藏本）	四八一	九〇			
成通集（神宮文庫藏本）	四八四	九〇			
田多民治集—忠通—（書陵部藏五〇一・四一）	四八六	九〇			
清輔集（書陵部藏五〇一・四三）	四九〇	九〇			

*印 影印・複製による

新編国歌大観

第三卷

私家集編 I

歌集

人丸集 [1人丸]

柿本集上

いはみの国よりきける人に

一はいはみなるたかまの山の木のまよりわがふる袖をいもみけんかも
二秋山にちるもみちばのしばらくもちりなみだれそいもがあたりみん
三いはしろの野中にたてるむすび松心もとけずむかし思へば
四紫にほへるいもがかくしあらばひとづまゆゑに我こひめやも
五みくまの浦の浜ゆふもへなる心はおもへただにあはぬかも
六神風のいせのはまをぎをりふせて旅ねかすらんあき浜べに
七夏野行くをしかのつかのつかのまも忘れず思ふいもがこころを
八あさねがみわれはけつらじうつくしき人のたまくらふれてしものを
九夕されば君きまさんとまちし夜の名こりぞ今もいねがてにする
一〇おもひつねにはなくともいぢるく人のしるべくなげきすなきみ
一一ときぎぬの思ひみだれてこふれどもなごやあといふ人もなし
一二あづき弓ひきみひかずみこずはこぞはなぞよそにこそみめ
一三玉ぼこの道ゆきつかれいなむしろしきても人をみるよしもがな
一四とにかくに物は思はずひだたくみうつすみなはのただひとすちに
一五あし曳の山田もるをのおくかびのしたこがれつづわがこふらくは
一六すぎたもてふけるいたまのあはざらばいかにせんとかあひみそめけん
一七なには人あしびたくやはすすたれどおのがつまこそとこめづらなれ
一八いもがかみうつをさきのはなれこまたはにけらしあはぬ思へば
一九あま雲のやへぐもがくれなるかみのおとにのみやはききわたるべき
さみの郎女あひわかれ侍りける時の
二〇おもふなと人はいへどもあふ事をいつとしりてかわがこひざらん
あふみよりのぼりてうちがはのほとりにて
二一ものふのやそうち河のあじろ木にいさよふ波のよるべしらずも
二三わがせこそきませの山と人はいへど山のなならし君もきまさず
かはを
まがねふくきびのなか山
二三おほきみがみかきの山をおびにするほそだにがはの音のきやけき

二四つき草に衣ぞそむる君がため色どり衣すらんと思ひて
二五なほあらじことなしくさいふことをききてしらばうれしからまし
二六山たかみ夕日がくれの浅茅はら後みんためにしめゆはましを
二七みし江の玉えの藤をしめしよりおのがぞ思ふいまだからねど
二八月草に衣はすらんあき露にぬれてののちはうつろひぬとも
二九わが心ゆたのたゆたにうきぬなへにもおきにも成りにけるかな
三〇久かたのあめにはきぬをあやしくもわがころもでのひる時もなき
三一ゆふかけていのるみむろの神さびていなにはあらず人めしげみぞ
三二ももづたひやそのしまべにこぐ舟にのりにし心わすれかねつも
三三ことしげき里にすまはけきなきしかりにたぐひていなましものを
三四河のせにうづまみれば玉もかるちりみだれたるかはの舟かな
よし野山にみゆきする時の
三五みれどあかぬよし野の山のとこなめにたゆる時なくまたかへりみん
三六いせの国にみゆきする時にきやうにとどめられてよめる
三七みをうみにふなのりすらんつまとにたまものすそに塩みちぬらん
三八もしほさみにいづしの浦にこぐ舟のいもるらんかあらき浜べに
三九たちはきのたふさのすゑにいまもかもおほみや人のたまもかるらん
四〇石見国にめをおきてのぼりてよめる
四一みさきのはもみやまもそよにみだるらんわれはいも思ふおきてきつれば
四二なみのみやのうせたる時
四三ひさかたのあめふることにながめせしみやのみことのあれまくもをし
四四あかねさし日はてらせどもむば玉の夜わたる月のかくらくをしも
ある人はいはく
四五しまみやのみかりの池のはなちどりひとめきらひていけにおよがす
四六はせのわう女をさかべの宮にたてまつる
四七しきたへの袖かへしてし君やたれのうちのすきをまたはあはんや
四八ひとつにいはいく、をちにすぎぬと、又ある本にいはいく、かはし
まのみこはぶるときはつせのわう女にたてまつれるなり
あすかのわう女をきむるときによめる
四九あすか河しがらみわたしせかませばながるる水のどけからまし
五〇ひとつにいはいく、みむとおもふや、また、みむとおもふらん、
わがおほきみのみなをわすれぬ、ひとつにいはいく、みなわすれ
ずと
五十一たけちのかみを、しきのかみにかりにをさめたてまつるときのお
聖まひさかたのあめにしぐるる君ゆゑに月日もしらずこひわたるらん

四六にはやすのみのちのつつみのかくれぬの行へもしらずとねりまどひぬ
めのしにて後によめる

四七秋山のもみぢをしげみまどひぬるいもをしむと山ぢくらしつ
四八しらずともまたひくみちをしらずともすまぢをゆけばいけりともなし
しらすとも、又ははいく、みちしらすとも

四九紅葉のちりぬる秋をたまづきのつかひをみればこよひおもほゆ
五〇ふすまぢのひくての山にいもをおきて山ぢをゆけばいけりともなし
又ははいく

五一こそみてし秋の月夜はやれどもあひみしいもはましとほさかる
五二家にきてわがやをみれば玉さきのほのかにおけるいもがこまくら
ひきてのうねめ身ななくるときよめる

五三あめのこがみつる日にはあはむひそおほのみしかばいまぞくやしき
あふみのあれたるみやをみて

五四さなみのしがのからさき行きてみれどおほみや人の舟まぢかねつ
五五あまぎかるひなのがぢをこぎゆけばあかしのとよりいへのおたりみゆ
五六このうみはよくこそあるらしいさりせるあまのつり舟波のうへにみゆ
五七すまのうらに舟のりすらんをためがあかものすそに塩やみつらん
五八おほぶねにまかぢのしぬにうなちとりこぎてわたる月ひとをとこ
あふみのみやのあれたるをみて

五九さなみややおほつうらはなのみして霞たなびきみやぎもりなし
さぬきのみ井のこじまにて、いはのうへにてしたるくびをみて
六〇つまもあらばつみてたかましきみやまのこのおはらきすぎぬべしやは
いはみのくににてなくなりぬべきをりによめる

六一おきつなみよるあらそしきたへの枕となりてなれる君かも
六二いも山のいはねにおけるわれをかもしらすていもがまちつつあらん
六三かみやまのいはねのたかあるわれをしらぬかひもがまちつつませる
六四山のかひそこともみえずしらがしの枝にも葉にも雪のふれば

柿本集下

六五人ごとは夏の草としげくともいもとわれとしたづさはりなば
六六山里は月日もおそくうつらなん心のどかにもみぢばもみん
六七このごろの恋のしげけん夏草のかりはつれどもおひしくがごと
六八かたよりいいとこそよれわがせこがはなたちばなをぬかんと思ひて

一四 紅葉はおとすしぐれのふるなへに夜さへそさむきひとりしぬれば
 一四二 たれかれとわれをなとひそ長月のしぐれにぬれて君まつわれぞ
 一四三 住よしのきを田にほりまきしいねをかるまでいもにあはぬなりけり
 一四四 秋の田のほのかにおけるしら露のけぬべくわれはおもほゆるかな
 一四五 秋の田のかりほにつくりいほりしてひまなく君をみるよしもがな
 一四六 あき萩のさきける野への夕暮にぬれつつきませ夜はふけぬとぞ
 一四七 萩はきのえだもたわわにおく露のきえもしまましわれ恋ひつつあらば
 一四八 秋萩におとすしぐれのふる時は人をおきめてこふるよそおほき
 一四九 さをしのかのあさふすをのくさわかみかくねてか人にしられぬる
 一五〇 我がやどにきける秋はぎぢりとはば秋にもあはぬ身とやなりなん
 一五一 秋さればかりとびこゆるたつた山^{たてふも}とどる^{たてふも}におきまけらしも
 一五二 なにすとかきみをいとはん秋はぎのそのはつ花のこひしきものを
 一五三 かりがねのはつ声ならできてちるやどの秋はぎみにこわがせこ
 一五四 さをしのかのいる野のすきはつをばないつしきかいたくらにせん
 一五五 長月を君にこひつづいけらずはきてちりにし花ならましを
 一五六 秋の夜の月かもきみは雲がくれしはしもみねば君ぞこひしき
 一五七 なが月の有明の月のありつつもきみしきまきまわれこひんかも
 一五八 はふりがこいはふやしろのもみぢばもしめをばこえてちりくるものを
 一五九 あしひきの山ぢもしらずしらがしのえだもたわわに雪のふれば
 一六〇 夜をさむみ朝戸をあけて出でぬれば庭もはだらに雪ふりにけり
 一六一 あは雪はけはなふりそ白たへのそでまきほさん人もあらなくに
 一六二 たがやどの梅のはなぞも久方のきき月夜にのこらざりけり
 一六三 梅花まづさく枝を折りもちてつととなづけて袖をみむかも
 一六四 きてみべき人もあらなくに我が宿の梅のはつ花ちりぬれどよし
 一六五 あは雪のふるにきえぬべくおもへどもあふよしもなみほどぞへにける
 一六六 あま霧あひふりくる雪のきえぬども君にはあはんとわがかへりきたる
 一六七 わがやどにききたる梅を月かげによななきつつみむ人もがな
 一六八 あしひきの山した風はふかねども君がこぬ夜はかねてさむしも
 一六九 あすよりはわかなつまんとかた岡のあしたのはらはけふぞやくめる
 一七〇 梅花それともみえず久方のあまぎる雪のなべてふれれば
 一七一 わがやどの池の藤なみ咲きにけり山ほとぎすいまきなかなん
 一七二 このうらにて藤の花をみておもひをのぶ
 一七三 たこの浦のそこへにはふ藤なみをかざしてゆかんみぬ人のため
 一七四 吉郭公なくやき月のみじか夜もひとりしぬればあかしかねつとも
 一七五 ひとしにありて一夜いもにあふひこぼしの我にまきりて思ふらんやぞ

「まわぎもこがあかもぬらしてうゑし田をかりてをきめくならしのはま
「七秋風の日ごとにふけばひさかたのをかの木の葉も色づきにけり
「七わがせこをわがこひをればわがやどの草さへおもひうらがれにけり
みかどたつた河のわたりにおはします御どもにつかうまつりて

「七たつた河もみぢななる神なびのみむろの山にしぐれふるらし
「七あはぬ夜のふるしら雪とつよりなば我さへともきえぬべきものを
「八あし曳の山したとよみゆく水のとときぞともなくこふる我が身か
「八しぐれのみめにはふれば槇のはもあらそひかねて紅葉しにけり
「八青柳のかづらき山にゐる雲のたちてもあても君をこそおもへ
「八みなぞこにおふる玉ものうちなびき心をよせてこふるこの比
「八四こといにていはばゆゆしみ山河のたぎつ心をせきぞかねつる
「八風吹けばなみたつきの松なれやねにあらはれてなきぬべらなり
「八六日のくもり雨ふる河のささら波まなくも人にこひらるるかな
「八七たちねのおやのかふこのまゆごもりいぶせくもあるか君にあはず
「八八こひて後にあはんとなくさむる心しなくはいきてあらめや
「八九恋するにしぬるものにあらませば我が身はちたびしにかへまし
「九〇こひてこひてしねとやわぎもこがわが家のかどをすぎて行きぬる

「九一あらいそのほかゆくなみのほか心われはおもはじこひはしぬども
「九二ますらをのうつし心もわれはなしよるひるわかずこひしわたれば
「九三わびつつもけふはくらしつかすみたつあすのはる日をいかでくらさん
「九四恋ひつつもけふはありなん玉くしげあけなんあすをいかでくらさん
「九五ちはやぶる神のいがきもこえぬべしいまは我が身をしかでくらさん
「九六山のはにさし入る月のつはつにいまをぞみつるこひしきまでに
「九七竹の葉におきる露のまろびあひてぬる夜はなしにたつ我が名かな
「九八なき名のみたつたの山とはさわげどもいさまた人をうるよしもがな
「九九なき名のみたつたの山とはさわげどもいさまた人をうるよしもがな
「一〇〇みな人のかきにぬふてふありますげありての後もあはんとぞ思ふ
「一〇一ますかがみてにとりもちてあきなあきなみれどもきみにあく時ぞなき
「一〇二たまゆらにきのふのくれにみしものをけふのあしたにこふべきものか
「一〇三かくばかり恋しき物としらませばよそにみゆべくあらましものを
「一〇四こひしとかこひもしねとか玉ばこのみちゆき人にこづてもなし
「一〇五あしひきの山よりいづる月まつと人はいひて君をこそまて
「一〇六あみではいくひきさにもあらねどもとし月のことおもほゆるかな
「一〇七いはねふみかきなる山はなけれどもあはぬ日かずをこひわたるかな
「一〇八たのめつこぬ夜あまたに成りぬればまたと思ふぞまつにまされる
「一〇九なるかみのしばしは空にさしくもりあめもふらん君とまるとるべく

「二〇むは玉のこよひなあけそあけゆけばあき行く君をまつもくるしも
「二一さきなみやしがのからさききたれども大宮人のふねましかねつ
「二二あしひきの山どりのをのしだりをのながが夜をひとりかもねん
「二三ちはやぶる神のたもてる命をもたがためと思ふれならなくに
「二四あじろぎのしらなみよりてせかませばなるる水ものどけからまし
「二五しらなみはたてど衣にかきならずあかしもすまもおのがうらうら
「二六あらちをのかるやのさきにたつしきもいとわがごとにもはおもはじ
「二七ほのぼのとあかしの浦の朝ぎりに鳥がくれゆく舟をしぞ思ふ
「二八なるかみのおとにのみきくまきもくのひばらの山をけふみつるかな
「二九いにしへにありけん人もわがごとやみわのひばらにかざしをりけん
「三〇よそにして雲にみゆるいもがいへにはやくいたらんあゆめくるこま
さるさはいけに身をなけたるうねをみてよめる

「三二わぎもこがねくたれがみをさるさの池のたまもとみるぞかなしき
「三三みなとりのあしわを舟はりおほみこひしき人にあはぬころかな
「三三あさ霜のきえみきえずみおもへどもいかでかこよひあかしたるかも
「三四みか月のさやけくもあらず雲がくれみまきそほしきうたて此ごろ
「三五まさしてふやそのちまたにゆふけとふらまさしにせよにもあふよし
「三六そらのうみに雲のなみたつ月の舟ほしのはやしにこきかへるみゆ
「三七ちちに人はいふとも人はおりつがわがはた物にしろきあさぎぬ
せむしう歌

「三八ますかがみしかとおもふいもにあはんかたまのをたえたる思ひしけきこの比
「三九夕されば秋風さむしわぎもこがときあらひ衣ゆきてはやきん
「四〇おほなんちすくなくがみのつくれりしいもせの山をみるがうれしき
「四一まきもくの山へひびきて行く水のみづのあわことよをばわがみて
「四二しきたへのでかへしきまたまだれのをちにすぎたるたまもあはんやは
「四三秋田かるかりはをつくりわがをれば衣手さむし露ぞおきける
「四四やたのに浅茅色づくあら山みねのあは雪さむくぞあるらし
「四五ふる雪の空にきえぬべくおもへどもあふよしなしとせへにける
柿木の丸あからさまに京ちかきところにくだりけるを、とくの
ばらんとおもひけれど、いきさかにさほることありて、えのばら
ぬに、正月さへふたつありける年にて、いとほなるがき心して
なぐさめがてらに、このよにあるくぐにの名をよみける、これ
なんあ中にまかりくだりたりつとて、あるやんこなき所にた
てまつりけるをなん
幾内五ヶ国
やまし

「三六うちはへてあな風さむの冬の夜やましるにしものおける朝みち
やまと
「三七ふるみちにわれやまどはんいにしへの野中の草としげりあひにけり
かうち
「三八あさまだきわがうちこゆるたつた山ふかくもみゆる松のみどりか
いづみ
「三九あまならでうみの心もしらぬかないつみにしほにみるめかるらん
つのくに
「四〇あしがものさわぐ入江の水ならでよにすみがたき我が身なりけり
東海道十五ヶ国
いが
「四一ちりぬともいかでかしらん山ざくらはるのかすみのたちしかくせば
いせ
「四二二葉よりひきこそうゑめみる人のおいせぬものと松をきくにも
しま
「四三山がはいしをわけて行く水はふかき心もあらじとぞおもふ
をはり
「四四春たてば梅のはながさうぐひすのなをはりにてぬひとむらん
みかは
「四五あだ人のことにつくべき我が身かはしらばやよそにこひてふらん
とほたあふみ
「四六ひねもすにとほたあふみにたねまきてかへるたをさきはるしからん
するが
「四七ふじのねのたえぬおもひをするからにときはにもゆる身とぞ成りぬる
いづ
「四八逢ふ事をいつしかとのみまつしまのかはらず人をこひわたるかな
かひ
「四九すまの浦につるのかひこのあるときはこれが千世へんものとやはみる
さがみ
「五〇あしがらのさかみにゆかん玉くしげはこねの山のあけんあしたに
むさし
「五一しをりせんさしたつねあしひきの山のをちに跡はとどめつ
あは
「五二春の田のなほしろどころつくとてあはけふよりせきさははじむる
思ひつ
かむつさ

「五三春の田のなほしろどころつくとてあはけふよりせきさははじむる
思ひつ
かむつさ

二五とめゆかむつぶぎに跡はみえずともしかのばかりはしといふなり
 しもつふさ
 二五梢しもひらけざりけり桜ばなしもつふさこそまづはさきけれ
 ひたち
 二五いつしかとおもひたちにし春がすみきが山ちにかからざらめや
 東山道八ヶ国
 あふみ
 二五ながれあふみなどの水のむまければかたへもしほはあまきなりけり
 み
 二五わたつうみのおきにこちかぜはやからしかのこまだらに波たかくみゆ
 ひだ
 二五さして行くみかきの山しとほければふは日たけぬあすぞいたらん
 しの
 二五あだなりといひせめられしぬれぎぬはひしなのみこそ立ちまきりけれ
 かんつけ
 二五おとにきくよしのさくらみにゆかんつけよ山もり花のさかりを
 しもつけ
 二五春きぬと人しもつけずあふ坂のゆふつけどりの声にこそしれ
 むつのくに
 二五いつかおひむつのぐむあしをみるほどはなにはのうらもなのみぞ思ふ
 いでは
 二五ゆふやみはあなおほつかな月かげのいでばや花の色もまさらん
 北陸道
 わかさ
 二五春たてばわがさは水につむせりのねぶかく人をおもひぬるかな
 あちせん
 二五しが山をこえゆく人をつづらづあちとせまたずときくはまことか
 かが
 二五おのがかくありけるものを花といへばひとつにはひにおもひけるかな
 のと
 二五せけばかつちりぬる山の桜ばな心のどかにおもひけるかな
 あちう
 二五はなのすあちうにまさりてにほひせばそれをそ人は折りてとらまし
 あち
 二五九人にすぎがなきおやの心ゆあちこさへにくくおもほゆるかな
 さに

二五のあづまのちのころし里におりてたつきぬをやからの衣といふらん
 山陰道丹後国八見如何
 たば
 二五春さめには水こそまさるらしたはたきこゑおとたかくなる
 たぢま
 二五はるがすみたちまふ山とみえつるはこのものさくらなりけり
 いなば
 二五鶯の声をほのかにうちなきていなばいづれの山を尋ねん
 ははき
 二五山ぎははきよくみゆれど天つ空ただよふ雲の月やかくさむ
 いはみ
 二五よとともになみなきいそのいはみればかたへぞかく時はありける
 おき
 二五草の葉におきる露のきえぬまは玉かとみゆることのはかなさ
 いづも
 二五ほどもなく今朝ふる雪のあさまだきいともいふはそらごとかきみ
 山陽道
 はりま
 二五たちかはります田の池のうきぬなはくれどもたえぬ物にぞ有りける
 みまさか
 二五きみがみまさがなくつねにはなれつつわがはなぞのにふみしだくり
 びぜ
 二五ときは山ふたばの松の年をへてくひぜにならんとしをみてしか
 びちう
 二五たもとひちうきて身さへぞながれつるわりなき恋のあはぬ涙に
 びじ
 二五ひごろへて見れどもあかぬさくら花風のさそはんことのねたさよ
 あき
 二五鶯のあきてたちぬる花のかを風のたよりにわれはみるかな
 すはう
 二五海鳥のたちゐてさわぐいそのすはうかべる舟ぞよそにすぎける
 なごと
 二五海のなかときはに入りてかづくあまも人にあはびはともしかりけり
 南海道
 きのくに
 二五あさみどり野への青柳いでてみんいとを吹きくる風はありやと

二五わがちかふことをまこととおもはずはあはちはやぶる神にとへきみ
 あはち
 二五あは
 二五八つゑのあはとはみえつつははきぎのものとをよりみる人ぞなき
 さぬき
 二五われはけきぬきてかへりぬから衣よのまといひしことをわすれず
 いよ
 二五はかなしや風にうかべるくものいよ心ぼそくぞ空にわたれる
 とさ
 二五みなとる舟こそけきはあやしけれ日たけて風の吹きてかへるに
 西海道
 ちくぜ
 二五かたみちくせに「いひやらんまきしわかなもおひばつむべく
 ひぜんちくこか、無歌
 二五三人をこひせめて涙のこぼるればかたのそでぞぬれける
 ひこ
 二五たれしも我をこふらん下ひものむすびもあはずとくるひごろは
 ぶぜ
 二五春の野にきのふうせにしわがこまをいづれのかたにさしてもとめん
 ぶこ
 二五花にてふこにてつねにむつれなんのどけからねばみる人もなし
 ひうが
 二五あはぬこひうかりけりとぞおもひぬる身をばこがせどしるしなれば
 おほすみ
 二五わがやどにおほすみ山のいかなれば秋をしらずてときはなるらん
 さつま
 二五はるの野の花をくさくさつまんとてさもかたみをもつくりつるかな
 ゆき
 二五ゆきかよふ雲はみちもなきものをいかでか雁のまどはざるらん
 つしま
 二五山河にみづしまさらばみな上につもるこのははおとしはつらん

赤人集

〔2赤人〕

一山たかみふりくるきりにむすばれてなくうぐひすのこゑまれなり
二はるたばわかなつまむとしめしのきのふもけふもゆきはふりつ
三わがせこにみせんとおもひしむめのはなそれともみえずゆきのふれば
四うぐひすのなきつるこゑにさそはれてはなのもとにぞわれはきにける
五しづかなるかきねもとめていつくにかはるのありかをともにとめん
六はなをえをりつるからにちりまがふにほひにあかずおもほゆるかな
七かみさびてふりにしきとにすむ人はみやこにほふはなをだにみず
八はるをみてかへんことのわするはこだきかげによりてなりけり
九としづきにまきとせしなとおもへばやほるしもつねにすくなかるらん
一〇あかでのみすぎゆくはるをいかでかはころにいてをしまさるべき
一一かねてよりわかれをしみしはるはただあけんあしたぞかぎりなりける
一二はるとのみどころにをしめともみなおなじろにすぎぬるがうき
一三はるばるとあひておいぬる身なればやあひになみだのあかれざるらん
一四いまははやかへりきなましふちのはなみとせしまにとしぞへにける
一五こつたへしみのりのいとよりければうぐひすとむるちからなきかな
一六花をのみたづねこしまにはるはまだふかさあさきもしられざりけり
一七はななくそらなるかせのとしをへてはるふきおもこぞあやしき
一八あたらしきはるの山へのはなのみぞとちもわかずさきにちりける
一九あたえてしづきやどにさくらばなちりはるまでみるひともし
二〇としかくおいぬるひとのかなしきはさけるはなをもたざるなりけり
二一ちかからぬときにひとたびわかれればとしのみにしへだたりける
二二わかれにしときをおもひてたづねればゆめのたましひはるけりけり
二三あきこにむすばれてぞすくしつるちりにしきとをこふるころに
二四わかれにしきみがみすていたづらにかたちのかはるみこそつられ
二五しらくもはわかるるこにたちぬればききみとにこそゆきかくれぬれ
二六わかれてのちもあひみんとおもへどもこれをいづれのとときかはし
二七ひとをおくるときにはるさへすぎぬればかれこれうらみあまたありけり
二八ちかからずはるけきほどにしをへてわかるることはくしかりけり
二九ふたつともみえぬつきの山こにてりわたりつあきらけきかな
三〇あつかうさむくもあらずよきほどにふきけるかせのやまずあまなむ
三二くもりなくきはやまさへはれゆけばみづのいろさへあらたまりゆけ
三三しらくものなをやりつつゆくみづのめでたきこは山にざりける

三三ひとりしてくものかけはしこえゆかんいづこのかたかやまはさがしき
三四ゆくみづのあをき山よりおちくればしらくもたつとみぞまがへつる
三五おきへよりふきつるかせはしらなみのはなとのみこそみえたりけれ
三六わびてゆくやどにひかりのくれゆけばふくかせのみぞとさしなりける
三七よそにてもはなをあらはれとみるからにしらぬ山べにまづいりにけり
三八さしわかでふかくあはれとみえければはれてしづきところなりけり
三九かげしげきみづのあたりはとしをへてすぎにけれどもあはれるかな
四〇ふくかせのひかりをととおもへばさしほしもこにあそぶべらなる
四一あやしきとしをながらへひとりしてあくがれたるみとやなりなん
四二あまつそらたかくはれつみえつるはくれゆくやまもとほくぞありける
四三やどこにはなのにしきをおればさるにころのやすきときなき
四四たにみづのこのねたえさきこゆればときをだにへだてずさきく
わがこふ

四五なくなみだこふるたもとにうつりてはくれなるふかきやどこそみれ
四六わかくときいひつるとしはるけきをちかきを見るぞわびしかりける
四七あはれともわがみのみこそおもほゆればはななきはるをすぐしきぬれば
四八ひととせにまたふたたびもこじものをただひるなかざはるはのこれる
四九うぐひすはすぎにしはるををしみつなくこゑおほきころにまるかな
五〇うづせみのみとしなりぬるわねれば秋をまたでぞやみぬべらなる
五一うぐひすもときならねばさなくこゑいまはまれらになりぬべらなる
五二かぎりとはるのすぎにしときよりさなくとりのねもいたくきこゆる
五三あきちかくはちすもひらくみづのおもにくれなるふかくいぞみえける
五四ふくかせにえだのむなしくなりゆけばおつるはなこそまれにみえけれ
五五なくえだのこゑふくのみきこゆるはのこれるはなをえだをこふるか
五六つきかげになてまきこのてりぬればなつこのふかくしもかぞふる
五七わが心しげきときにはふくかせのみにあらねとすずしかりけり
五八やまふかたにをわけてつゆくみづのふきつるかせぞすずしかりける
五九あまのがほどのほるかになりゆけばあひみるこのきだめなきかな
六〇秋のよのしもにたどへしわがみかほとしのはかなくおしいつもれば
六一おほかたの秋くるからにわがみこそかなしきものとおもひしりぬれ
六二おくしにもくきのかれゆくときよりぞむしなくねもたかくきこゆる
六三ひととせにただこよひこそたなばたのあまのかはらをわたるてふなれ
六四ものおもふころのあきになりぬればすてはひとぞみえたりける
六五おほかたの秋をあはれとみることもあてなる人はしらずぞありける
六六つねよりもあきのこははおくらんにくれなるふかくみえわたるかな
六七かすかなるときのみみゆるあきのよはものおもふこそすくなかりける

六八すぎてゆくあきのかなしくみえつるはおいなんことをおもふなりけり
六九もみちばのいろくれなるにみえつるはなくせみのはやなくなりぬらん
七〇あきのよをさむみなきつるむしのねはわがやどにこそあまたきこゆれ
七一ゆくかりのあきすぎたにひとりあてどもにおくれてなきわたるかな
七二ふくかせのおとたかくのみきこゆるはおくつゆうたさむくもあるかな
七三このはみなからくれなるにつくるとしてしものさらにもおきまざるかな
七四あきのよをさむみなきつゆくかりのしものをのきてたちかへらん
七五しののめにおくしらすつゆのさむければただひとりしてせみのなくらん
七六あきのよをかりはなきつづぐれどもまつことづてはみゆるよもなし
七七そらにかりとぶことはやくみえしよりあきはかぎりとおもひしりにき
七八なくえだのこゑだにたてきこえなばたびなる人はおもひまさりぬ
七九なくせみのこゑたかくのみきこゆるはのきふくかせのふくぞうれしき
八〇いつしかとはるをむかふるあしたにはまづよきかせのふくぞうれしき
八一さふけてなほねられねばはるかせのふきつることもおもほえぬかな
八二ひととせにふゆくとしはけふふしおきてみれどあしがたきに
八三あたらしきうれはおほくきむきよのながきよりこそはじまりにける
八四ものをおもふころはひとくだけどあつきおきにはおほばざりけり
八五わがみのみなしらゆきになりゆけばおけるしももおとらざりけり
八六ひとごとにかぞへこしまにはかなくてひととおいぬるものにざりける
八七あくまでにみてるさけにささむきよはひとのみにあまたまりけり
八八おいぬればははやさめぬとしなへよはにすぐればねでのみぞふる
八九よひにまたおくしものころければくさばをだにぞからせざりける
九〇ひとりあてもゆるほのほにむかへばやかげをとみなふみとはなりぬる
九一かくばかりおいぬとおもへばいまさらにひかりのすぐるかげをしまず
かせのふく

九二かさぎのみねとびわけてとびゆけばみやまかくるつきかとぞみる
九三くもはれてきよきかげけふならずあらんかぎりはをしみこそせめ
九四わかれてのちはしらぬをいかならんとときにかひとのあはんとすらん
九五そこひなくものをとおもふあかでのみわかれしものをおもふわが身は
九六よのなをとおもひしりぬる心こそみよりもすぎてもおもひしりけれ
九七ころをしまのうきになしつればながるみづにしづまざりける
九八はななくそらにわがみのひとりしてあしたゆふべにしげかるらん
九九したなくてそらにうかべるころこそゆめみるよりもはかなかりけれ
一〇〇わがみをばうかべるくもになきざらばゆくかたもなくはかなからまし
一〇一まぼろしのほどしりぬる心にははるくるゆめとおもほゆるかな
一〇二かりせめにしづかうかべるたましひのみなあわとのみたとへられける

一〇三 くろかみのしろくにはかになりぬればはるのほどぞみえたりける
 一〇四 われがみもはるのかぎりに入らばくきなるとおもひしりなん
 一〇五 ゆめにてうれしきことをみるときはただにうれふみにはまされり
 一〇六 くもわけてみやこたづねてくるかりもはるにあひてぞとびかへりける
 一〇七 はるのくにあひてもあはぬころかなはなゆきとのみふりまがひつつ
 一〇八 はるのみやはなはさくらんたにきむらうもるくさはひかりをもみず
 一〇九 しらなみのたちかへりくるかずよりもわがみをなげくことはまされり
 一一〇 あしたのひとりおくれでなくこゑはくものうへまできこえつるかな
 一一一 あまぐもをみかくすらんひのひかりわがみくらせとみるよしもなき
 一一二 おもふことなくうぐひすがつげたらばいろもかはらぬわが身とやみむ
 一一三 みやこまでなみたかしどもきこえなくにしはしだになどみのしづむらん
 一一四 ほどとぎすつきならねどなきにけるはかなくはるをすくしきぬらん
 一一五 わかのうらにしほみちくればかたをなみあしべをきしてたづなきわたる

(空三)

一六 はるののにあるきすのつまひにおのがかりかをひとにしられつつ
 一七 ひかたのあまのはやまにこのゆふべかすみたなびくはるたちくらし
 一八 あづきゆみはるはやくやくとせづきくらんぐひすのこゑ
 一九 うちなぎきはるきりくればしかすがにぞらくもあひゆきはふりつつ
 二〇 むめのはなさきちぬらししかすがにしらゆきには
 二一 まきもくがひばらにたてるはるがすみ
 二二 いにしへのひとのうあけむすぎのはにかすみたなびくはるはきにけり
 二三 とくかみをまきもくやまにはるさればこのはるしきてかすみたなびく
 二四 はるがすみわかれてともにあをやぎのえだくひもちてうぐひすなきつ
 二五 かげろふのゆふさきりくればかりびとのゆめみえがたにかすみたなびく
 二六 むらさきのねばひよちよのはるののきみをこひけるうぐひすぞなく
 二七 わがせこをならしのやまのよぶこどりきみよびかへせよのふけぬとき
 二八 あさぎこにきてなくこどりながだにもきみにこふらしこなつたなく
 二九 ふゆもりはるはたちきにあしひきの山にものうぐひすなきつ
 三〇 はるなればつまよもとむるうぐひすのこゑをつたひなきつはふる
 三一 かすがなるはがひやまなるさほのうらはゆくきたれをよぶこどりぞも
 三二 こたへぬによびなをかしそよぶこどりさほの山べをのぼりくだりに
 三三 あさつゆにしとどにぬれてきなんどりかみやまよりなきわたるなり
 三四 いまさらゆきふらめやはかへるふもゆるはるべとなりしものを
 三五 ふぶきつゆきはふりつつしかすがにかすみたなびくはるはきぬらし
 三六 やまぎはにうぐひすなきつうちなぎきはるとおもへばゆきふりしきぬ
 三七 みねのうへにふりおくゆきはかせのおともとにちるらしはるはありとも

つくばやまをよめる

一三 きみがためやまだのさはにゑぐつむとゆきげのみづにもすぞぬらしつ
 一四 むめがえになきてうつろふうぐひすのはねしらたへにあはゆきぞふる
 一五 やまたかみふりくるゆきをむめのはなちりかもくるとおもひけるかな
 一六 このうたはよみかはせる、かすみえいす

一四 きふこそとしはくれしかはるがすみかすがの山にはやたちにけり
 一五 ふゆすきてはるはきぬらしあさひさすしがの山べにかすみたなびく
 一六 あづきゆみはるになるらしかすがやまかすみたなびくよめにみれども
 一七 うぐひすのはるになりぬらし春日山かすみたなびくよめにみれども
 一八 しもがれのなかのやなぎはふるひとまづらにすべくおもほゆるかも
 一九 あさみどりそめかたたりとみるまでにはるのやなぎはもえにけるかな
 二〇 やまもとにゆきはふりつつしかすがにこのかはやなぎもえにけるかな
 二一 あをやぎのいとほそきをはるかぜにみだれるいろにみせんとぞかし
 二二 むめのはなをりもてみればわがやどのやなぎのまゆもあはれなるかな
 二三 はなえいす

一四 うぐひすのこづたふえだのうつりがはさくらのはなのときのまつぎぬ
 一五 さくらばなときはすぎねどうぐひすのこひはさかりといまやなくらん
 一六 わがさとのやなぎのいとをふきみだるかぜにやいもむめはちるらん
 一七 としごとむめはちれどもうつせみのよにわれはしもはるなかりけり
 一八 うちつけにとはおもへどもはじめてもまづまほしきむめのはなかな
 一九 あしひきのやまのはてらすくらばなこのはるさへにちりにけるかな
 二〇 うちなぎきはるはたちぬらし山もとのわがよのすゑにさきちるみれば
 二一 ああ山のさくらはなははけふもかもちりみだるらんみる人なしに
 二二 かはづなくよしののかはのたきのうへにあさぎのはなぞさきてあだなる
 二三 はるのきじなくたにもとにさくらばなちりぬべくなるみる人もがも
 二四 はるさめにあらそひかねてわがやどのさくらはなはさきそめにけり
 二五 はるさめはいたくなふりそくらばなまだみぬひとにちらまくをし
 二六 はるさめはちらまくをしとくらばなまだみぬひとにちらまくをし
 二七 はるののにすみれつみにとこしわれぞのをなつかしみひとよねにける
 二八 いっしかもこよあけなうぐひすのこづたひちらすむめのはなみむ
 二九 みわたせばかすがのうへにかすみたちひらくるはなはさくらばなかも
 三〇 ときみればまだふゆなるをしかすがにはるがすみたちゆきはふりつつ
 三一 こぞさきしくきいまさくいたづらにつちにやちらんみぬ人なしに
 三二 月をえいす
 三三 あさがすみはるひくれなば木のまよりうつろふつきをいつかたのまん

一七 はるがすみたなびくけふのゆふづくよきよくてらんたかまつのやま
 一八 はるさればこくれおほみゆふづくよおぼつかなしのはなのかげにて
 一九 あめをえいす
 二〇 はるのあめにありけるものをたちがくれいもがいへちにこのひくらしつ
 二一 かすがのにけふらつめりやをかしははるのおほきにあめのふるかも
 二二 野にあそぶ

一七 はるがすみたつかがの「ゆきかへりわれもあひみむ」
 一八 はるののころのべんとおもふどちしけふのひはくれずもあらなん
 一九 ももしきのおほみやびとはいとまあれやむめをかざしきこにつどへる
 二〇 すみよしのさきゆきしかばはるはるのいとまれにみむきみにあへるかも
 二一 かうべをめぐらす
 二二 かすがなるみかきのやまのつきもいでぬかもせきやまにさけるさくら花

一七 ふゆはすぎはるはきぬれどとしきはあらたまれどもひとはふりゆく
 一八 はるをあひきく

一八 はるの山にるうぐひすのあひわかれかへりますまのおもひするかも
 一九 わがやどののしたづくよいもがためうはこころうたてこのころ
 二〇 わがやどののさきはるのとしごとにおもひますともわすれめやわれ
 二一 むめのはなさきちるのべにわれゆかんいもがつかひはわれてまつらん
 二二 ふちなみのさくのべごとにはふくずの
 二三 はるののにかすみたなびくくらばなうちなるまでにあはぬきみかな
 二四 わがせこをわがこふらくはおくやまのあせみのはなのいまさかりなり
 二五 むめのはなしだりやなぎにおりませてはるにそふるはきみにあるかも
 二六 はるをなへしきくのべにおふるしらつつじらぬこともいひしわがこと
 二七 しもをよす

一八 はるのたてばくさきのうへにおくしものきえつつわれやこひやわたらん
 一九 かすみによす
 二〇 はるがすみやまにたなびきくすいもあひみてのちぞこひしかりける
 二一 はるがすみたちにし日よけふまでわがこひやますひとのしげきに
 二二 あをつらひもをたづねとはるの日のかすみたちもちこひくらしつ
 二三 みわたせばかすがののべにたつかすみまのほしききみがあたりに
 二四 あやしきはわがやどののみたつかすみたてれるれども君がこころに
 二五 こひつもけふはくらしつかすみつあすのはる日をいかでくらさん
 二六 あめによす、このうたは人丸集にあり

一九 わがせこにこひてすべなきはるさめのふるわきしらずいでてくるかも
 二〇 はるのたてばしげしわがこひわたつみのたつしらなみにとへぞまされる